

「掟と戒めと法と愛と」

大人になると、あまりしないことですが、何か約束をする時に「指切りげんまん」という儀式がありますよね。「指切り」とは、約束の取り交わしを表していて、「げんまん」は「拳骨を一万発」という意味、続く「針千本飲ます」は、そのままの意味で、約束が破られた場合の、厳しい罰を表しています。総じて、このわらべ歌と言いますか、古い約束の儀式は、「約束を破ると、非常に重い罰が待っているから、お互い気を付けようね」という申し合わせです。しかも、興味深いのは、それを子ども達同士が無邪気に交わすというね。それだけ、「指切りげんまん」が生まれた時代は、「約束を守る」ことが道義的に、倫理的に物凄く重要だったということでしょう。

キリスト教の前身であるユダヤ教も、こと約束や契約ということについて、充実した考え方を持っています。まず、「無条件契約」と呼ばれる、人間側の制約が課せられない契約がありました。例えば、神様が虹を掛けて誓われた「ノア契約」や、「信じることで救われる」という信仰義認に繋がった「アブラハム契約」は、この「無条件契約」にあたります。

一方で、今日の聖書箇所にも関連する「シナイ契約」と呼ばれる神様との約束は、「指切りげんまん」的な制約を伴うものです。モーセさんがシナイ山において十戒を受け取ることで締結された、この契約は、律法順守による祝福を約束すると同時に、それを破った場合の呪いもセットで受け入れるものでした。「この約束をちゃんと守るなら祝福し守ってあげるけど、もし守らないと、とんでもないことが起こるぞ」という内容の契約だったということです。それは、一方的な十字架による救いの実現を知っている私たちにとっては、少々異様に見えるものかも知れません。祝福と呪いが表裏一体のワンセットというわけですから、不思議な感じです。

しかし、置かれている時代状況によって、御言葉の方向性が変わるように。例えば、戦争の最中に預言される御言葉と、平和な街中で語られる御言葉との間には、自ずと違いが表れるように。人間と神様が取り交わした契約の中身も、その時の状況によって異なる性質を持つことは不自然ではありません。「掟と戒めと法を守り、御声に聞き従います」と、ガチガチに規律・戒律に縛られているように見える、今回の聖書箇所も、イスラエルの民を守り、導き、発展させるために、神様が必要を思われ、与えてくださったものであるということです。

そもそも、今日の聖書箇所が収録されている「申命記」という書物は、ユダヤ教の内部に、異なる宗教の文化が流入し、元来の姿を見失いつつある中で、非常に重要な役割を担った書物として伝承されています。ユダヤ教の憂慮すべき状況で見出され、「本来のユダヤ教とは、こういうものだ」と、「神様に愛されているイスラエルの民は、こういう存在だ」ということを明確に教えてくれたのが「申命記」でした。言い換えるなら、「申命記」とは、「世直しのために与えられた貴重な預言書」ということです。

「世直し」が目的であるため、必然的に、その内容は自由を伝えるよりも掟を、赦しを述べるよりも戒めを、という具合に規律・戒律を重視する傾向にあります。しかし、その規律・戒律を受け入れることで、当時のイスラエルの民は、自らの所属と、存在価値について再認識する方向へと導かれていきました。「自分たちは尊い民である」と、「この約束を守ることのできる私たちは特別なのだ」と。現代から捉え直すと、その特別な選民思想は、行き過ぎだったと評価せざるを得ない一面もあります。ただ、ユダヤ教として、あるいはイスラエル国家としての存続が危ぶまれた時代に、こういう厳格な契約が神様との間に取り交わされたことは、キリスト教誕生に至るまでの歴史を踏まえると、有意義であったと評価できるでしょう。と言うのも、今は自由を生きる私たちもこの厳しく、呪いさえも伴った契約を土台として存続した神の民の系譜に属しているからです。

ただ、何度も言うように、時代は変わり、神の民が置かれる状況も変わっていきます。信仰の純粹さと国家の存続が至上命題だった時代に与えられた契約は、決して廃れることはなくとも、その役割の度合いを変えていきます。信仰と国家が、かつてほど強く結びつくことの無くなった時代。異邦人もまた神様の救いの中に置かれていると確信されるようになった時代。自然と、その契約の形も変わっていききました。実は、この「契約の形が変わる」という、その事実が、すでに神様の愛の表れですね。イエス様の御言葉にもありますが、「律法の本質は愛である」という信仰理解は、古来ユダヤ教の時代から、神様と人間の間で交わされてきた契約が、固定化せずに柔軟に更新され続けてきた事実からも証明することができるでしょう。やっぱり、神様は人間を契約で縛って罰することよりも、ユダヤ人・異邦人の区別なく、もっと多くに人たちが祝福を受けて生まれ、恵みの内に生きることを良しとしてくださるのだ、ということです。

今や、今日の聖書箇所 19 節の御言葉は、私たちにもしっかりと響いています。「造ったあらゆる国民にはるかにまさるものとし、あなたに賛美と名声と誉れを与え、既に約束したとおり、あなたをあなたの神、主の聖なる民とする」。この申命記が最初、重要視された時代では、当然、私たち異邦人が、この誉れ高い約束の中に置かれることはありませんでした。しかし、その後の歴史の中で、イエス様がお生まれになり、そして十字架で死なれ、その後、ペトロさんやパウロさんの宣教の業が実り、福音が全世界へと伝播することで、幸いなことに私たちも神様の民として約束を交わすことができるようになりました。しかも、ちょっと美味しいこと取りみたいな感じで。祝福の部分だけ受け取って、呪いの部分は破棄されている形ですね。まさに「愛と、憐れみと、慈しみに富みたもう神様」ということです。

ただ、そんな風に深く愛され、憐れみと慈しみを十分に注がれている私たちだからこそ、掟や戒めや法を超えて、為すべき奉仕と献身があることも事実です。私たちは、主の十字架の故に、制約

に縛られることも、呪いを恐れることもありません。しかし、その類稀な恵みの中を生きる者として感謝を忘れず、そして、神様の似姿としての相応しい振る舞いが求められています。神様は、確かに私たちのあらゆる過ちや失敗を、主の十字架の故に赦してくださるでしょう。でも、それは神様の御心が痛まない、何も感じられないということではありません。私たちが間違いを犯せば、神様は悲しまれるでしょう。私たちが誰かを傷付ければ、神様の御心も傷付いてしまわれるでしょう。そう弁えて、私たちは自由な神の民として、自らの行動を整え、神様に賛美と栄光を帰することができるような歩みを続けて参りたいと思います。

最後に、先日の仔羊会で共有された相談事を紹介します。仔羊会と言うのは、福井県下のキリスト教主義幼稚園の集まりのことですが、その委員会で、こんなことが言われました。「幼稚園には沢山のお約束があります。登園時間を守ることもそうだし、持ち物を揃えることもそうだし。料金の支払期限とか、申込の期限とか。色々あります。でも、私たちだって忘れることはあるし、間違えることはあるし。だから、お家の方が少しくらい間違えたり、遅れたりしても仕方ないかなって思うんです。でも、そう言うとき現場の先生たちの中には、『規則は規則で、それは入園の時に確認したことなので、他の頑張って守ってくれているご家庭もあるし、ちゃんと毅然とした対応をすべきです』って言う人もいて。確かに、お家の方みんながお約束を守らないと幼稚園のことはグチャグチャになっちゃうし、でも、あまり厳し過ぎるのも、キリスト教の大切な愛の教えと違う気がするし。どうしたらいいですか？」と。個人的には、どうしたらいいのか、確固たる正解は思いつきません。ただ、そうやって悩みながら、お家の人の事情を慮り、先生たちの主張にも耳を傾け、その狭間で「どうしたものか」と思い巡らす姿こそ、なんだかキリスト教っぽいなあ、と思います。

「掟と戒めと法と、そして愛と」。規則に忠実な竹を割ったような結論は、楽ちんでしょう。組織の運営も円滑だと思います。でも、その楽ちんで、円滑であることの隙間に取り残される人がいる

かも知れないと思って、面倒臭く悩ましい「愛」を選び取る勇気を、私たちは忘れないでいたいと思います。お祈りを致します。

神様。何の功もない、どころか、失敗を重ね、知らず知らずのうちに誰を傷付けてしまうこともある私たちを、にも関わらず、今日もこの礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたは、かつて厳しい御心で、御自分の民と契約を交わされました。その契約が強く、盤石であったことで、今なお続く信仰の営みがあります。その歴史的な事実を受け止めて、私たちも、あなたとの約束を心に留め、自らの言葉と行いを整えて参ります。一方で、あなたは、たとえ私たちが間違えても、失敗してもイエス様の十字架によってお赦しくださる方であると私たちは知っています。そのことに感謝して、私たちは、あなたのような寛容の心を持てるように、隣り合う人たちを愛し、許すことができるように努めて参ります。私たちが、契約と許し、掟と愛の狭間で迷いそうになる時、どうかあなたが取るべき道をお示しください。あなたの御心が実現し、この世界に平和が実現するよう、私たちのことを十分に用い、と同時に、私たちのことを大いなる祝福と恵みで満たしてください。

このお祈りを大切なイエス様の御名前を通して、あなたの御前にお捧げ致します。